

〔播磨風土記〕讀容郡船引山、略○中 此山住鵲、一云、韓國鳥、栖古木之穴、春時見、夏不見、

〔扶桑略記〕應神四年癸巳、鷄生鵲巢中、生子四足、

〔日本書紀〕推古十二年六月四月、難波吉士磐金、至自新羅、而獻鵲二隻、乃俾養於難波杜、因以巢枝而產之、

〔日本書紀〕天武十九年五月辛未、高向朝臣麻呂、都努朝臣牛飼等、至自新羅、略○中 新羅王獻物、略○中

鵲二隻、及種々寶物、

〔後撰和歌集〕夏四 だいまらす

よみ人まらす

かさ、ぎの峯とびこえて鳴ゆけば夏のよわたる月ぞかくる、

〔散木弃詞集〕戀八 修理大夫顯季の八條の家にて、人々戀の歌よみけるによめる、

増鏡うら傳ひするかさ、ぎに心かろさの程をみるかな

〔花營三代記〕貞治七年元安九月十八日、御前白鵲居之、

〔本朝食鑑〕林六禽山鵲

山鵲

狀如鵲而鳥色有文采、白頂白冠、青項黑頰、赤臆白腹、其尾長白而未有黑斑、赤髻赤足、性惡如鳥、往年自華至、長崎食不應歟、水土不遇歟、不能永養之而易死、故不蕃息也、

〔飼鳥必用〕中山鵲

此鳥繪書たる通り見事也、髻赤く頭は淺黄にて、目の下より胸へ黒羽有り、脊淺黄にて大羽の先黒し、足は極赤也、尾の長壹尺五寸計有り、尾持羽短し、行き宜敷そろい、至て奇麗也、鳥の程かけす程可有也、繪書たるは蓮雀至而長く見へ候得共、現鳥はれんぞやく畫にかいたる程は無之、日向國高鍋の城主被飼置、後には薩州に出たるといふ事を聞、唐繪杯には此鳥の圖多し、唐に多キ鳥と思ふ也、いかさま貳拾年も過て落たり、

〔重修本草綱目啓蒙〕林三十三禽山鵲 サンジョク 通名 三光チャウ 伯州 サンコチャウ 防州 關